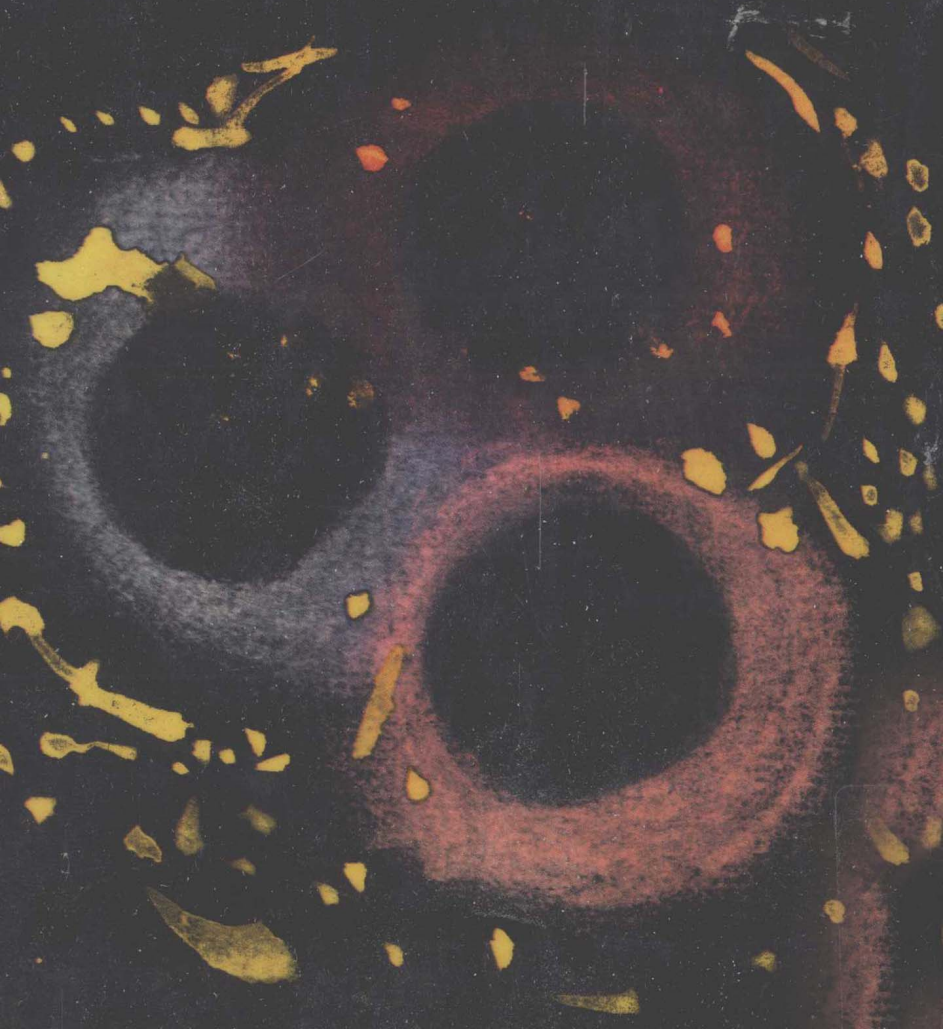
黒水晶物語

斎藤 栄



品物語

黒水晶物語　五二〇円

昭和四十七年四月二十五日　印刷
昭和四十七年五月　五日　発行

著　者　斎藤　栄
編集人　浜田琉司
発行人　朝居正彦
印刷所　凸版印刷
製本所　正文社
発行所　毎日新聞社
〒一〇〇　東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇　大阪市北区堂島上
〒八〇二　北九州市小倉区紺屋町
〒四六〇　名古屋市中村区堀内町

〈検印廃止〉　©斎藤　栄　一九七二

0093-400055-7904

黒水晶物語　目次

名人と梅　七
蔵の中　一七
新布石　三一
雪のラプソディ　六〇
叛乱　七四
湖水のほとり　八八
小天狗慎太郎　一〇三
母の秘密　一一七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

懊悩　一三三
対決　一四七
出征　一六一
サナトリウムにて　一七六
悲しい五月　一九〇
真相　二〇五
不死鳥　二二八

裝幀　內山懋

黒水晶物語

名人と梅

一

〈誰かが見ている……〉

六歳の慎太郎は、子供心にそれを感じた。杉板に墨罫を引いた手製の盤に向かって、この茶店のあるじ、中田八右衛門は何も知らない様子で、右上隅の征関係を読んでいる。長い眉の白毛が、時おり、ぴくっと動く。勝負に熱中したときの八右衛門の癖である。

開け放された障子の向こうから、満開の梅が富貴な香を漂わせていた。

慎太郎は菓子器の金米糖を、ひとつまみ口に入れ、そっと店先を窺った。三人連れの客の姿が見えた。観梅の帰りだろう。茶の襟巻をした品のいい小柄な老人を中に挟んで、配偶者らしい女と青年が、日盛りの縁台に腰をおろしている。

「お疲れさまです。空っ茶をどうぞ」

お愛想を言ったのは、八右衛門の妻よねである。

かちっと堅い音がして、このとき八右衛門が白石をおろした。黒の肩を衝いた、征当りの手だ。

「慎太。おめえの番だぞ」

訝る声で、慎太郎は慌てて盤上へ目をやった。しかし、落着きはなくなった。碁石の音が冴え渡ったとき、三人の客は確かにこっちを見た。特に中央の角刈の老人の視線は、火箭のように真っ直ぐ、慎太郎を射竦めたのだ。

〈見られている〉と思ったのも道理。さきほどから、その小柄な人物が、慎太郎を注視していたに違いない。

局面は既に黒が大勢を制している。四子にしては、白の打ち方が甘かった。

金米糖で少しべとついた指に、薄い碁石を摘まむと、慎太郎は黒石を中央へ押しあげた。

「そうかそうか。さすが和尚の直伝だけある。……強うなったな」

八右衛門が溜息まじりに言ったとき、慎太郎は背後にまた、焼けつくような視線を感じた。五、六メートル以上離れているのに、すぐ肩越しで見られる思いだった。

慎太郎は八右衛門が石を打つと同時に、無造作に打ち返した。早く終えてしまいたい気持になった。一昨年、妙見寺の住職、仙海師に碁を習ってから、ずいぶんと人前で石を打ち、大人に負けずにきた慎太郎である。めったなことで人目を気にしたことはない。

それがどうも妙であった。

慎太郎の手の動きにつれて、老人の視線がそれを追っている風なのだ。慎太郎は足を崩す拍子に、もう一度、三人の客を盗み見た。

「先生。おみ足はいかがです？　先程、岩角にぶっつけたところは？」

茶呑を手にして、青年が訊いている。色の浅黒い、壮士風の男だ。

「ああ……」

老人は気のない返事をしている。風体はいかにも、田舎おやじ然で、小金を持った商家の主人の散策に見える。

「あなた。城所さんが心配してらっしゃるわよ。もう大丈夫なのでしょ？」

「うむ」

老人は相変わらず、気の抜けた応答である。けれども、慎太郎はぎゅっと身内の締まる思いがした。

やっぱり、老人はそれとなく慎太郎の石の動きを注目しているのだ。あるいは、一〇メートルに近い間隔をおいて、盤上の競り合いを、読み切っているのかもしれない。そんな気さえする。

「いけなかったか、この手は」

八右衛門は一つ咳払いして、打ったばかりの白石を、節くれ立った指で押さえた。

「こっちの方がおもしろそうだ。こうしたらどうする？慎太」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

慎太郎は、すかさず黒石を打ちつけた。
「なるほどな、たいしたことはないか。仕方がない」
既にヨセの段階だった。ぱたぱたと手数が進んだ。
かすかな紅梅の香に、慎太郎が顔をあげたとき、座敷の脇に老人と青年の姿があった。よねに断わったものだろう。梅の香は、城所と呼ばれた青年の帯の技折梅から漂っていた。老人の右の頬に、かなり大きな黒子が二つあった。
「ダメもなし……と」
未練そうに、八右衛門が見渡している。盤面は二十目近く黒がよかった。つまり、これはもう、四子の碁ではないのだ。心得のある者が観れば、せいぜい二子と離れていないことがわかったはずだ。
「四つも置かせると、なかなか勝てないもんだ。慎太も強うなったよ」
他人の目を意識して、八右衛門は盤上の石をかたづけながら、言いきかせるように笑った。
「城所……」
老人が青年に目配せした。
「は」
と、城所は袴の膝を躙寄った。
「なかなか打つようですね。ひとつお願いしましょうか？」
「え……わしが？」
八右衛門は白石を握ったまま、城所に訊きかえした。
「いや、こちらの……」
「慎太……慎太郎……お前だと」
慎太郎は怪訝な顔をした。
「だれと？」
黒子の老人の方が強そうなので、そっちを振り向いて訊き返した。その方に興味があった。しかし、城所が前にさっさと進み出た。
「お客さん、どのくらいお打ちになる？」
八右衛門は碁好きのことで、席を空けながら城所に訊いた。
「たいしたこともありません」

城所はそう言ってから、
「とにかく、星目でお願いしましょう」
と白石を引き寄せた。
「お客さん、この子はやりますぞ」
慌てて言う八右衛門は、白毛の眉の下で、訝し気に目を剝いた。
「さ、お願いします」
城所はかまわなかった。慎太郎はやはり気乗りがしない思いだった。師の仙海和尚とは、先月五子になったばかりだが、いくらなんでも星目とは馬鹿にしている。
「あなた……今日はゆっくりなさるお約束ですよ。城所さんも困るわねえ……」
縁台を立った老人の妻女が眉をひそめて呼びかけた。が、その声は途中で、声高の酔客に跡切られた。風体は土地者らしくない。東京あたりの書生だろう。五、六人が冷酒に顔を赤くして、店先で騒ぎ始めた。
慎太郎は真剣な顔で盤に向かった。星目の碁に負けたら、和尚に申しわけないと思った。

城所は左利きと見え、碁石を左の指先で摘まんでは、ぽとんと石を置く。慎太郎は子供らしい直観に従って、すらすら打ち進んだ。中盤の手どころで、城所は姿勢を正した。このとき、慎太郎は不意に、
〈こわい……〉
と思った。八右衛門にない、殺気のようなものが、城所の全身に漲った。慎太郎はなぜか二年前、山で道に迷った夜のことを思い出していた。恐ろしかった。
厚い唇を噛みしめ、城所のこめかみが、びくびく痙攣した。さっと左手が伸びると、白石が隅の小ゲイマに袖がかりしてきた。慎太郎は反射的に黒石を沿いつけた。続いて白が小ゲイマの切りを狙う。関連したハメ手である。しかし、慎太郎は知らなかった。知らなかったけれど、正しい三雁行の受けを打った。
続いて、白は激しくはね返しに出た。薄い盤が鳴って石が躍った。初めて慎太郎の手がとまった。
「わかんないや……」
そう呟いて、がりがりと金米糖をかじった。が、次の

瞬間、
「うむ」
と深く首肯いたのは、黒子の老人であった。
黒は見事、急場を狸の腹鼓でしのいでしまったのだ。
これで、争いは中央に移った。打ち手は相変わらず早かった。終局まで二百五十手はあったろう。しかし、両者ともほとんどノータイムで進めた。
「負けちゃった」
ダメが終わったとき、慎太郎は投げ出すように言った。数えてみると、一目白勝ちである。
「打てる……」
と、老人は眼鏡の奥で目を細めた。
「いくつ？　……六歳か、ほう」
楽しそうに笑った。そして、八右衛門に丁寧な礼をすると、妻女の待っている茶店先へすべるように出て行った。
「はは。悪かったな。もう帰る、もう帰る」
弁解する老人の声は、小柄な躰に似合わず底力があった。
慎太郎は城所の後ろ姿を見送りながら、急に口惜し涙が溢れてきた。見ず知らずの風流客に遅れをとったことが、こんなにも残念だとは考えてもみなかったのだ。
咽喉の奥が変に甘辛かった。

二

杉田の梅は三月に満開となる。種類は、浪花、薄紅梅、種割、青梅、豊後と数が多い。特に妙見寺境内の名木、照水梅、斜窓梅は古くから雅客の称賛の的であった。
この時季になると、八幡宮の前から梅林にかけて、茶店や屋台が狭い沿道に並ぶ。八右衛門の中田屋も、そうした茶店の一軒だった。
慎太郎は中田屋を飛び出すと、チビタ下駄で裏山を抜けた。表通りには、まだあの三人連れがいるような気がしたのである。
慎太郎と母の千鶴は、津田久平の家に間借り生活をし

ていた。千鶴の夫――と言っても籍は別だったが――村瀬謹弥は震災で死に、千鶴は姉の稼ぎ先を頼るほか身寄りのない女だった。

津田の家は、先代の久蔵以来、屏風浦の海苔養殖に力を注いでいたので、邸の敷地も二〇〇〇平方メートルはあった。

裏からはいって庭先を覗くと、千鶴はタスキがけで、海苔すだれの手入れに余念がない。海苔は例年、十一月から二月頃まで忙しいのだ。梅の頃には、来年に備えて用具の手入れをする。それは主に女の仕事だった。

「どこにいたの、慎太郎」

黙って駈け込もうとする姿を見て、千鶴は呼びかけた。杉田に住むようになってから、五年経つ。二十五になったばかりの千鶴は、すっかり陽焼けしていた。

「来年は学校に行くんでしょ。妙見さんでなければ、家でお勉強なさい」

「碁だよ。中田屋のおじいさんとこ……」

慎太郎はすぐ言い返した。夫の村瀬謹弥は坊門で二段を許されていた。だから千鶴は、わが子の碁の指導を、妙見寺の仙海師に頼んだのである。千鶴の祖父、山岡純桂が、妙見寺の再興に力を借した間柄だった。慎太郎はそう言う千鶴の気持を、すばやく察したのだ。

「そう……それで？」

「勝ったよ……でも、お客さんに負けちゃった」

慎太郎は素直に言った。

「お客さんて……どなた？」

「知らない。とても強かった。おじいさんとふたりで来てね。ぼくが打った人は左ぎっちょだった」

「左ぎっちょ？」

「うん、おじいさんは右のほっぺたに、黒子が二つあった」

「その人、背の小さい……」

「そうだよ」

「お前となんで打ったの？」

千鶴は勢い込んだ。

「ううん。おじいさんとはやらなかった。左ぎっちょの

人と星目でやって、一目負けちゃった」
「慎太郎……」
千鶴は顔色を変えた。珍しいことだった。
「その人は、そのお年寄りは名人かもしれない。いいえ、きっとそうよ。おとうさまの先生だった秀哉名人ですよ。
その証拠に、お前と打った人が左に石を持ったでしょう。それはね、左ぎっちょじゃなくて、自分が専門棋士だってことを、人目から隠すためです。
いつだったか、おとうさまがそんなお話をしたことがあるのよ」
慎太郎は、すぐには千鶴の話が呑込めなかった。本因坊名人といえば、子供心では、はるか遠い国の存在だった。一生、その姿を見ることがあるかどうかさえ、はかり知れなかったのだ。それがあの、田舎者然とした年寄りだなんて。
慎太郎は黙った。黙っていたが、自分に向けられた老人の、恐ろしいほどの鋭い視線をゆくりなくも思い起こした。
「それでね、慎太郎。お前と打った方のお名前は？」
千鶴はたたみかけた。不思議なことに、その表情に、暗い怯えの影があった。
「みんなが、キドコロって、呼んでいたみたいだったよ……」
返事が終わらぬうちに、千鶴の上体は、ふらっと傾いた。顔色は真っ蒼だった。
「城所……」
「どうしたの？　気分が悪い？」
慎太郎は甘ったれた声で慌てて呼びかけた。それほど、千鶴の変わり方は激しかった。両手で顔を抑え、崩れるようにその場へしゃがんだ。濡れた手の水滴が、頬に光る筋を引いた。
「大丈夫よ」
ややしばらくして、千鶴はエプロンで顔を拭い立ち上がった。が、依然として、血の気はなかった。まるで、庭先の雪のような白梅の光を受けたかと思うほど、病的

に美しく見えた。
「貧血？」
慎太郎は生意気な言葉を使った。日頃、低血圧気味の母親が、よく口にするので知っていた。
「違うわ。驚いただけ。心配しなくていいのよ」
慎太郎には訳がわからなかった。
〈驚いたって、いったい、なんのことだろうな〉
「城所って人、知ってる？」
そう訊いてみた。
「慎太郎。今はそのお話はしません。でもね。お前はいつか、もう一度、その人に会うようになるのよ。機会があればそのうちに教えてあげます」
千鶴は俄に厳しい声で言った。そうしたときの千鶴は、慎太郎にとって、こわい母親だった。
「はい」
と彼はおとなしく答えた。
「今日から、城所の名を胸に刻みつけておきなさい」
「覚えておくだけでいいの？」
「そうよ。それがおとうさまのためになるんです」
千鶴はまた不思議なことを言った。慎太郎はそうした母との会話が、とても重荷だった。彼は「はい」と返事をすると、夢中で土間の方へ駈け出していた。
風はまだ冷たかった。

翌日は雨が降った。
慎太郎は千鶴に言われ、妙見寺の方丈に仙海和尚を尋ねた。境内の楽天梅や求古梅の見事な白い花弁に、細い雨の糸が吸いこまれていた。
「慎太郎か、あがれ」
物音を聞いて、奥の方で和尚の蛮声が響いた。
方丈の窓際には、いつものように、仙海師愛用の天極盤が覆(おお)いを払ってあった。
「昨日、星目で負けたそうだな」
和尚は慎太郎の顔を見るなり、キメつけるように言った。
「はい。城所という人に……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com